



## せんみ 千三つさんの話

松本 聰美

### プロフィール

「ばやし」同人。『テストどろぼう、犯人はだれだ?』『あしたまではひみつのはimitsu』、当会編「家族っていいね5・6年生」―放課後の怪談4―収載作品など。

子どものころ、ぼくは千三つさんの話が好きだった――。「千三つさん」というのは、ひいじいちゃんのだなだ。千の話しても本当のことは三つだけ、つまり「ほらふき」ってことだ。

足のキズあとを見せて、海で大ダコと戦った話や、山のサルと友だちになってお使いをたのんだりする話を、ぼくはひいばあちゃんのひざにすわって、なんども聞いた。

ひいばあちゃんはコロコロとよく笑う。笑うたびに太ったおなかがぶるぶるふるえて、きもちがよかった。ひいばあちゃんは、ぼくの頭をなでながら、よくいったんだ。

「マコトちゃん、うちが死んだら、一日五分でええで、千三つさんのそばにおったげて。そばにおるだけでええから」「うん。一日五分やな」

そのたびに、ぼくはひいばあちゃんと指切りをした。三年生の冬休み明け、ひいばあちゃんが亡くなった。

ぼくはひいばあちゃんとの約束どおり、毎日、千三つさんのとなりすわった。五分なんてあつという間だった。

千三つさんの話を聞いたり、いっしょにテレビを見たり、五分どころか三十分も一時間も千三つさんといっしょに過ごした。けれど、千三つさんは、ひいばあちゃんがいなくなると、だんだん元気がなくなって、ぼくが話しかけても「ああ」とか「ほう」とだけ返事することが多くなった。

「八六歳やからな、千三つさんも話すのに疲れたんやろ」と、父ちゃんはいった。それでもぼくは毎日、千三つさんのそばにいった。小指を見るたびに、ひいばあちゃんとの指切りを思い出したからだ。中学生になっても、ぼくはひいばあちゃんとの約束を守った。合宿で留守にするときは、千三つさんに電話をしたり、ハガキを書いたりした。千三つさんのために時間を使うこと、それが千三つさんのそばにいたことだと、中学生のぼくは考えた。

「五分って、なんて長いんだろう」

そう思ったのは高校何年生だったろう。友だちとバカ話をしている時間はあつという間に過ぎるのに、千三つさんとの時間はなかなか進まない。